

JSSR 第 14 回 Visiting Scholar Program に参加して

2019年9月と10月に第14回 Visiting Scholar Program に参加させて頂きましたので、報告致します。

今回、私が本プログラムに応募させて頂いたのは、第13回に参加された広島安佐市民病院の藤原先生のお話をお聞きしたのがきっかけでした。藤原先生は以前からアジア諸国の脊椎外科の先生との交流を活発に行っておられ、経済だけではなく、医療分野でも目覚ましい発展を遂げているアジア諸国のお話をお聞きして、是非実際に行って自分の目で見てみたいと思い、応募させて頂きました。研修先についても、藤原先生の推薦を頂いて、インドネシアの Spine Division, Department of Orthopaedic and Traumatology, Cipto Mangunkusumo National Central Hospital の Dohar Tobing 先生とマレーシアの Spine Research Unit, Department of Orthopaedic Surgery, Faculty of Medicine, University of Malaya の Kwan 先生の2つの施設を訪問させて頂くこととなりました。

2019年9月16日から9月20日まで Cipto Mangunkusumo National Central Hospital を訪問しました。ジャカルタに行くのは初めてでしたが、まず驚いたのは交通渋滞でした。世界第4位の2億5500万人の人口を誇る大国インドネシアの首都であるジャカルタは都市圏人口が3200万人と、東京都市圏に次いで世界第2位のメガシティですが、地下鉄等の公共交通機関が発達している東京とは違って、ジャカルタではほとんどの人が車かバイクで移動するため、想像を絶する渋滞でした。

中心部には巨大なデパートが立ち並び、大変活気のある町ですが、病院の事情は日本とはかなり異なりました。プライベートクリニックと違って、公的な医療機関では保険の縛りが厳しく、使用できるインプラントも限られており、その中でやりくりしないといけないのが現状でした。また、脊椎手術患者の構成は日本とかなり異なり、脊椎カリエスと外傷が大半を占めており、Dohar 先生も、近代化が進み、経済は発展していても、カリエスの症例が一向に減る気配がないと嘆いておられました。頸椎カリエスの症例を含めて、数例の手術を見学させて頂きました。私はカリエスの手術経験は数例しかありませんが、さすがに毎週のように脊椎カリエスの手術をされている Dohar 先生は、骨破壊の強い頸椎カリエスの症例も、手際よく病巣を搔把され、絶妙なバランスでケージを挿入されて固定されていました。講演では JSSR のモニタリングワーキンググループの研究の紹介を含めて、山口大学での研究について紹介しましたが、特にモニタリングについて興味がある様でした。インドネシアでは主として神経内科医が術中モニタリングを行うため、コスト的な面からもモニターを行わずに手術を行うことも多く、脊椎外科医がもっとモニタリングの知識を勉強する必要があると実感しました。

1か月後に2つ目の施設であるマレーシアの Spine Research Unit, Department of Orthopaedic Surgery, Faculty of Medicine, University of Malaya を訪問しました。

当初は1週間の訪問の予定でしたが、出発便が台風の影響で急遽キャンセルとなり、何とか3日後の便を確保して、結局3日間の短期訪問となりました。Kwan先生は側弯症の領域では御高名な先生で、できるだけ多くの側弯の手術を見学させて頂こうと考えていましたが、手術のキャンセルもあり、結局手術見学は1例のみでした。1例のみの手術見学ではありましたが、術前計画から丁寧に説明して頂き、論文にもされているKwan先生のUIVとLIVの決定の仕方と、オリジナルのバランスをとるためのデバイスを使用したTilt angleの決定方法は大変勉強になりました。また、手術に関しても2人の術者が同時に展開して、スクリューを挿入していく手際の良さには、まさに『One team』の阿吽の呼吸を感じました。講演については、やはり術中モニタリングに興味があるようでした。側弯症の手術は麻痺のリスクの高い手術の一つですが、有名なKwan先生の施設でも、術中モニタリングに関しては、日本と比較してかなり遅れている印象を受けました。この点はKwan先生も認識されており、今後の課題だと言われていました。

日本に帰国して、Dohar先生の紹介で、Spine fellowを1人受け入れて欲しいとの依頼を受け、現在山口労災病院で手術見学を中心に研修中です。彼は側弯症の手術で完全麻痺の経験があるとのこと、脊髄モニタリングにも興味があるようです。今後はインドネシアでも脊椎外科医がモニタリングについての知識を深めて、安全な脊椎手術を広めて欲しいと切に願います。今後もアジア諸国と日本の脊椎脊髄外科医の交流の橋渡しの一助となれるように、微力ではございますが努力して参りたいと存じます。

最後になりましたが、この度の貴重な機会を与えて頂いたJSSRの選考委員の皆様、会員の皆様、並びに2週間という長期にわたる研修のご許可を頂いた田口敏彦病院長にもこの場をお借りして深謝を申し上げます。

写真1：インドネシア大学にて（向かって左がDohar先生、中央が私、右が医学部長）



写真2：マレーシア大学にて（右が Kwan 先生）

